

北村昌美先生を偲んで

東北支部長 阿部 修

本学会の名誉会員である北村昌美先生が 2012 年 8 月 13 日にご逝去されました (享年 86 歳)。山形大学名誉教授で、鶴岡市の名誉市民でもありました。北村先生は、東北支部の我々にとって先に亡くなられた桂木公平さんとともに、心の支えともいうべき存在でした。

北村先生は、東北支部の発足に発起人の一人としてご尽力され、1994 年度には渡辺善八先生の後を受けて 2 代目支部長として 1997 年度までその任に当たられました。その間、鶴岡市で開催された全国大会の大会委員長となられ、特別講演会では自ら「雪国の生活」という楽しい鼎談の座長を務められたことが記憶に残っています。

このような北村先生の業績に対して本学会からは 1991 年に「豪雪地の林業に関する研究と教育ならびに学会の発展に尽力した功績」により功績賞を、また、同東北支部からは 1998 年に「森林文化論活動を通じ雪国の発展に寄与された功績」により東北雪氷賞 (特別功績賞) が授与されています。

昨年 6 月頃、東北支部長に選任された私から東北支部の顧問について継続確認のお電話を差し上げたときには、健康上の理由でお断りされたので、少し心配していたのですが、その後、お葉書が届いて、健康が回復したら役に立てるかも知れないとありましたので、大いに期待していたところで、しかし、今年に入り思わしくない状態が続き、慢性心不全のため亡くなられたとのこと。誠に残念でなりません。

北村先生は林学の分野では数々の業績を残されていますが、門外漢の私には、著書「森林と文化—シュヴァルツヴァルトの四季—」を読んで受けた感動をまず思い浮かべます。それまで私は、東

北地方が良い意味で自然に恵まれているという話をうのみにしていたのですが、この本を読んで、それでは人間の側はどうなのだろうかと、疑問の目で見えるようになりました。これは、現在の林業の停滞ぶりを見ればわかりますが、自然と共生しているように見える私たち日本人が、実は森林との関係が希薄なのではないかという先生の問いかけは、私の目を覚まさせ、身近にある防風林や防雪林へと関心を向かわせたのでした。

北村先生は、偉大な業績をあげておられるにもかかわらず、だれにでも気軽に声をかけて下さるお人柄でした。亡くなられる前、病床に伏せながらも東北の各地の温泉に行きたいとせがまれたそうです。ご出身は兵庫県と伺いましたが、すっかり東北の地になじんでおられたのではないかと想像されます。これまでのご厚情に深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



東北支部発足後の最初の総会時に開催された講演会での北村先生 (前列左 1986 年 5 月 30 日, 新庄市)、四手井元会長 (前列中央) の講演に林野関係者が集結された。

(2012 年 10 月 9 日受付)